

令和7年度

小松島小学校
「学力向上実行プラン」

学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

- 自分の意見や思いを伝え合う授業の実践
- 一人一台のタブレット端末やICTを効果的に活用する授業の実践

校長

後藤 由美

学力向上推進員

西崎 仁美

【各校の取組状況の把握について】

管理職による授業参観や教員からの報告等、様々な機会を捉え、取組状況の把握を行う。

◎次の(1)～(3)をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

(1)知識・技能の習得

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○個人差はあるが、漢字の読み書きや計算などの基礎的・基本的な知識・技能は少しずつ伸びてきている。 ●読書が好きな児童も多いが、文章を読むことに抵抗感がある児童も見られる。	・基礎的・基本的な知識・技能を身につけ、国語・算数の単元末テストで80点以上とることができる。 ・資料や新聞を活用し、語彙力を高め、文章を正確に読んだり正しい言葉で書いたりすることができる。	・朝のジャンプアップタイムで漢字、計算などの反復練習を行ったり、AIドリルを活用したりして、基礎的・基本的な内容の習得を図る。 ・読書活動を推進し、あわっこタイムズデーで新聞を活用するなどして文字に親しみ、語彙を増やすとともに、文章を書く機会を増やし、自分の思いを表現できるようにする。		・単元末テストにおける基礎的・基本的な知識・技能で80点以上を達成する児童は7～8割程度であった。 ・読書を通して文字に触れる機会が増えたことで、言語活動を楽しむことができた。しかし、児童によって個人差があり、課題のある児童も見られた。	・基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付けるため、漢字・計算などの反復練習を行ったり、AIドリルを活用したりする。 ・あわっこタイムズデーを継続して行い、発達段階に応じて記事を視写したり要約したりして、いろいろな文章に触れる機会を増やす。

(2)思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○基本的な話型を見たり、事前に考えを書いたり、小グループで話したりすると、自分の考えや思いを全体に発表することができる。 ●自分の思いや考えを筋道立てて相手に分かりやすく伝えることに課題がある。	・他者の意見と自分の意見を比較・関連付けながら聞いたり、自分の思いや考えを筋道立てて相手に分かりやすく伝えることができる。	・ペア学習やグループ学習、討論などを授業に取り入れる。 ・「意見のもち方・言い方(手引き)」を必要に応じて提示し、ペア学習やグループ学習のときに使うことができるようにする。 ・授業の終末に振り返りを位置付けて、自分の考えや学んだことを書いたり発表したりできるようにする。 ・他教科とも関連付けながら、各教科で学んだことを活用して表現する課題を設定し、取り組むことができるようにする。		・ペア学習やグループ学習、討論などを授業に取り入れることで、自分の考えを積極的に伝えようとする児童が増えた。 ・授業で学んだことや分かったこと、感じたことなどを自分の言葉で表現している。そしてその振り返りを生かして、次時の学習につながっている。 ・各教科において、単元末に学んだことを活用して表現する課題に取り組んだことが、他教科における表現する活動に生かされていた。	・自分の考えや意見はあるが、積極的に相手に伝えようとするのに課題を感じている児童が多いので、授業や集会等で意図的に相手に伝える場面を設け、表現力の向上を図る。

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○多くの児童が落ち着いて学習に取り組む、学習や生活のきまりを守って学校生活を送ることができている。 ○異学年での活動や行事を通して、認め合う機会が増え、自己肯定感が高まりつつある。 ●自ら学習課題を見つけたり、計画を立てたりすることに課題がある。	・自ら学習課題を見つけ、解決できるように計画を立て、実践することができる。 ・主体的に学習し、学んだことを生活に生かそうとすることができる。	・子どもたちの学びたいという意欲につながる課題設定を促す。 ・自分で課題設定が難しい児童でも意欲的に取り組めるよう、個に応じた支援を準備する。 ・異学年交流の機会を計画的に設定する。 ・メンター制度を活用し、教員間で授業改善の情報交換をする。		・学習課題を設定する時間の確保が難しく、十分ではなかった。 ・自分で課題設定が難しい児童の様子を把握し、個に応じた支援ができた。 ・昨年度より回数が減ったが、きらり班活動や集会活動を通して異学年が交流を深められるような活動ができた。 ・授業方法やスキルを情報交換でき、授業改善につながった。	・学習課題を設定する時間の確保が必要である。 ・自分で課題設定が難しい児童でも意欲的に取り組めるよう、個に応じた支援を教師が準備する必要がある。 ・異学年交流の機会を今後も計画的に設定していく。 ・メンター制度を継続し、研修の場を設定していく。互いに情報を交換しやすい雰囲気作りに努め、意欲的に研修に参加する。